

# 『百人一首図絵』を読む

## ——相模の歌意絵をめぐるって——

藤 川 功 和

### はじめに

『百人一首図絵』は、文化四年（一八〇七）に刊行された『百人一首』の絵入り注釈書です。「歌仙絵」と歌人達の「古説系図」と身分ごとに作者を分類した「百人一首作者部類」とを一冊に纏めたものと、一首ずつの歌の内容を絵で表した「歌意絵」を纏めたもの二冊の計三冊で構成されています。『百人一首』関連の書籍は江戸時代に数多く刊行されていますが、それらの中でも本書は歌意絵の独自性等から、先学によって注目されています<sup>1)</sup>。

今回は、前稿の続きとして、六十五番歌の相模を取り上げてみたいと思います<sup>2)</sup>。

### 凡例

一、尾道市立大学附属図書館蔵『百人一首図絵』[911.1 / Ta98]を底本とした（書名の表記は外題による）。

一、歌仙絵、古説系図、歌意絵の各図版と翻刻本文を掲載した。

一、翻刻に際して、以下の処理をした。

・字体は適宜あらため、ルビは底本のままとした。

・行取りは適宜あらため、読解の便を考慮し、句読点、濁点等を付した。また、割注には（～）を付した。

一 相模の歌仙絵と古説系図と歌意絵

— 翻刻と語注 —

【歌仙絵】



① 〔翻刻本文〕  
 相模（父源頼光朝臣也。或説為大江公資妻為相模守、依之号相模）

恨わびほさぬ袖だにある物を恋にくち南名こそをしけれ

【古説系図】

相模  
 先祖不詳入道一品宮女房本名  
 乙侍従或説は相模守大江公資  
 女或妻正説と云く此故号相模一  
 説母能登守廣濕保胤女と云

〔翻刻本文〕

相模  
 先祖 不詳 入道 一品宮 女房 本名 乙侍従  
 或説に相模守大江公資女、或妻正説と云々、  
 此故号相模、一説母能登守広滋保胤女と  
 云々。

【歌意絵】



右様  
うらみわびほさぬそでだにある物をこひにくちな  
ん名こそをしけれ  
後拾遺集恋四 永承六年内裏哥合にとあり  
永承は ③ 後冷泉院の御宇也。

○うたのころろは、としをへてこふれどもつれ  
なくのみあるひとをうらみわびて、つねになみ  
だにぬるゝそでをほすまだになきを、名さへい  
たづらなる恋にくたはしてんがをしきと也。

説神もをそすれも  
のうらみわびほさぬそでだにある物をこひにくちな  
ん名こそをしけれ  
後拾遺集恋四 永承六年内裏哥合にとあり  
永承は ③ 後冷泉院の御宇也。

〔翻刻本文〕

相模

うらみわびほさぬそでだにある物をこひにくちな  
ん名こそをしけれ

② 後拾遺集恋四 永承六年内裏哥合にとあり。

永承は ③ 後冷泉院の御宇也。

○うたのころろは、としをへてこふれどもつれ

なくのみあるひとをうらみわびて、つねになみ  
だにぬるゝそでをほすまだになきを、名さへい  
たづらなる恋にくたはしてんがをしきと也。

⑤ 一説、袖はくちやすきものなるに、それさへある  
をといへる あはれふかきにやといへるはよろし  
からず。

⑥ 永承六年五月五日殿上哥合

左 勝 相模

うらみわび

右 ⑦ 右近少将源 経俊朝臣

したもゆるなげきをだにもしらせばやたく火のか  
げのしるしばかりに  
⑧ 栄花物語にみえたり。

〔語注〕

①相模―生没年未詳。正暦三年(九九二)頃の誕生か。

通説では養父を源頼光とする。母は、慶滋保章の女。寛弘年間(一〇〇四―一二)に、橘則長と婚姻関係にあった。乙侍従の名で、藤原妍子に出仕。長和二年(一〇一三)頃に大江公資と再婚。治安元年(一〇二二)、公資が相模守に任じられた折に同道。後に入道一品宮脩子内親王のもとに相模の名で出仕。歌人としては、長元八年(一〇三五)『賀陽院水閣歌合』、永承四年(一〇四九)『内裏歌合』などに出詠。

②後拾遺集恋四くにとあり―当該歌が『後拾遺和歌集』恋四所収歌であることを詞書を引用しつつ指摘する。『後拾遺和歌集』には、当該歌を含め相模詠が三十九首入集する。

③後冷泉院―後朱雀天皇第一皇子。母は、藤原道長女嬉子。万寿二年(一〇二五)八月三日生、寛徳二年(一〇四五)正月一六日即位、治暦四年(一〇六八)四月一九日崩御。四四歳。『後拾遺和歌集』以下の勅撰集に六首入集。

④うたのこころはくをしきと也―「涙に濡れて乾く間もない袖さえ朽ちてしまいそうなのに、その上、

名も朽ちるのが惜しい」と解する。近世の古注釈は多くこの説に拠っている。

⑤一説くよるしからず―「あるものを」を「存在するの」と解して、「涙に濡れて乾く間もない袖は朽ちないでいるのに、我が名が朽ちるのが惜しい」とする説で、近世以前の古注釈に見えるが、『百人一首図絵』は否定的である。

⑥永承六年五月五日殿上哥合―「殿上根合」ともいう。披講は永承六年(一〇五一)五月五日。主催者は後冷泉天皇で、判者は内大臣藤原頼宗。出詠歌人は一〇名。記録によれば、まず根合が三番に短縮されて行われ、つづいて五題(菖蒲、郭公、早苗、祝、恋)五番の歌合、その後管絃御遊が催された。当該歌合から『後拾遺和歌集』以下の勅撰集に七首入集する。『栄花物語』、『袋草紙』、『古今著聞集』などに詳しい記事がある。

⑦右近少将源経俊朝臣―正しくは隆俊。源隆国男。万寿二年(一〇二五)生、承保二年(一〇七五)三月一三日没。五一歳。当該歌合では右方の講師もつとめている。後冷泉天皇主催の永承四年『内裏歌合』に出詠がみえる他、後冷泉天皇の皇后寛子(関白藤原頼通女)主催の天喜四年(一〇五六)

四月三〇日『皇后宮春秋歌合』では詠師をつとめている。勅撰集には、以下の一首が入集する。

秋夜対月といふことを

太皇太后宮大夫隆俊

月見てはなれにし人も恋しきにわれをば誰かおもひいづらむ

〔続古今和歌集〕雑歌下・一七四二〇

⑧ 栄花物語にみえたり―『栄花物語』巻第三六・根あはせに当該歌合に関する記載が見えることを指摘する。以下一部を引用する（本文は小学館「新編日本古典文学全集」）。

内裏には根合せさせたまふ。左の頭資綱の頭中将、右の頭四条中納言の子の経家の弁、若くはなやかに、おぼえある人々なり。左右二十人づつわきて、えもいはぬ洲浜の垣根を尋ねつつ、まだ知らぬ恋地に下りつつ引き出でたる一丈三尺の根などもありけり。文台、打敷、華足などの有様いふべきにもあらず。中宮、皇后宮など上らせたまへり。中宮女房の装束は、たたいとうるはしく、ことさらに菖蒲の衣をみな打ちて、撫子の織物の表着、よもぎの唐衣、棟の裳なり。皇后宮のは、菖蒲、棟、撫子、杜若など、金し

て花鳥を造り、口置き、いみじきことどもを尽させたまへり。をりをりにつけてをかしきことのみ多かり。

永承六年五月五日殿上歌合

一番 左持 左馬頭源経信朝臣

菖蒲

よろづ代に変わぬものは五月雨の雫に薫るあやめ草かな

右

つくま江の底の深さをよそながら引けるあやめの根にて知るかな

（後略、以下、五番（左相模、右隆俊）まで記載される）

## 二 歌意絵を読む―錦木塚の意味―

さて、歌意絵で注目されるのは、画中詞に「錦木塚」として見える塚でしょう。

「錦木」については、和歌において、男が思いを寄



せた女の家の前に木を立て、女は男の思いに応ずる  
気持ちがあればその木を家の中に入れ、なければそ  
のままにして、その場合、男は千束を限りに毎日一  
束ずつ女の家の前に置くことができたという風習に  
由来する詠が古来見られます。

勅撰集では「錦木は立てながらこそ朽ちにけれけ  
ふの細布のむねあはじとや」（錦木は恋人の家の戸  
口に立てたまま朽ちてしまった。「けふの細布」は  
狭くて胸元が合わないように、恋人は逢うまいとい  
うのだろうか）（『後拾遺和歌集』恋一・六五一・「題  
不知」・能因法師）が早い例です。

「錦木塚」については、三年の間思いを寄せる女  
の家の前に錦木を立て続けるもついに叶わなかった  
男と相手の機織りの女の亡霊が、旅の僧に供養を頼  
むという筋立ての世阿弥の謡曲『錦木』において、「み  
とせの日数重なるをもつて千束とも読めり。又この  
山陰ににしきづか<sup>1</sup>とて候。是こそみとせまで錦木た  
てたりしものの古墳なれば、とり置くにしきぎの数  
共につかに築きこめて是をにしきづかと申し候」と  
語られ、やがて「中央の歌枕の伝承」が「逆移入さ  
れ」、東北の各所に錦木塚がみられるようになりま  
した。

『百人一首図絵』と近い時代に目を転じると、『謡  
曲画誌』（享保一七年〔1732〕刊）は、「錦木」  
で立項し、女の家の前に三年錦木を立て続けたもの  
の遂に思いが叶わず「飲食を断、二十日余に終に空  
しく」亡くなった男と、それを知り「深淵に身を投」  
げた女を憐れんだ里人が、「二人が死骸をその所に  
埋」めて「夫婦塚と名づけ錦木を埋みし塚を錦塚と  
号」したとする記載が挿絵とともに見えます。

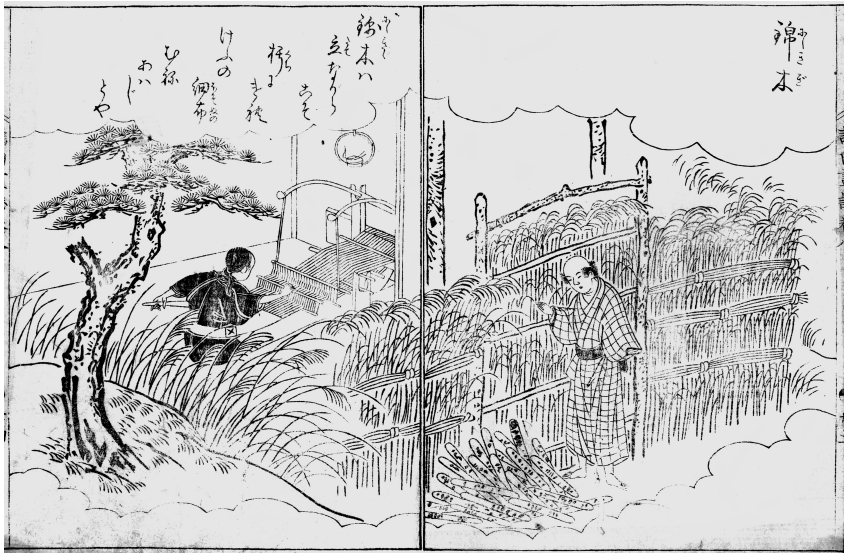
また『東国名勝志』（宝暦一二年〔1762〕刊）は、  
「錦塚」で立項し、「いにしへ此所のならひに女を  
恋わたれるに、にしき木とて柴をつかねて門にたつ  
るに、いなめば其まゝすてをきぬることぞ千束にあ  
まりて、男つゝに恋死しとて錦塚の名は残れり」と  
いう塚の由来と能因の詠が挿絵に添えられています。  
このような事例から、『百人一首図絵』が刊行さ  
れた当時、「錦木」や「錦木塚」は、それらをめぐ  
る伝承と併せてある程度認知されていたものと思わ  
れます。

では、相模の歌意絵になぜ錦木塚が描かれている  
のでしょうか。

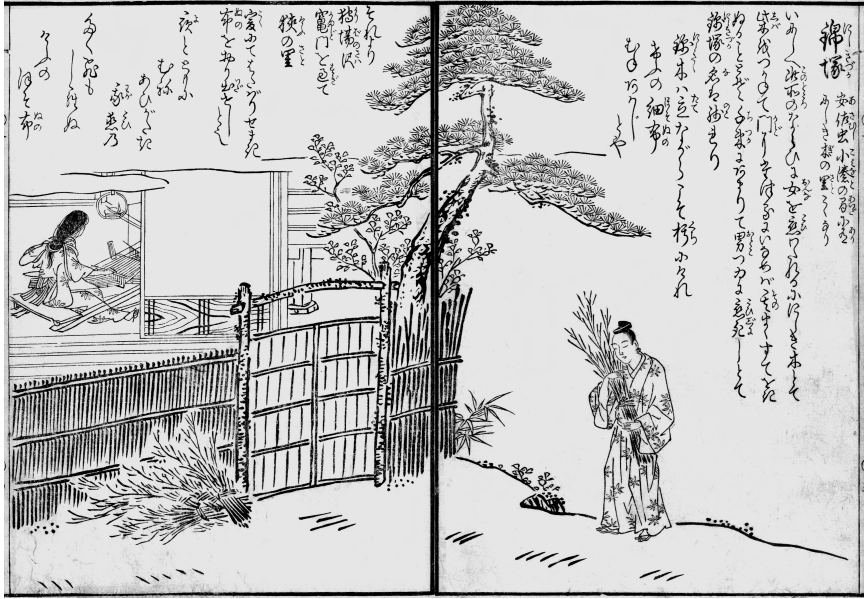
この点について、葛飾北斎の『百人一首うばがえ  
とき』の画想到『百人一首図絵』の影響を看取され



旅中の僧が、錦木や細布を手にした男女の亡霊と邂逅する。



女の家の前に錦木を立てる男。女は家内で機を織っている。



〔東国名勝志〕一・錦塚、画像は本学図書館所蔵本

女の家の前に錦木を立てに来る男と家内で機を織る女。

た岩切友里子氏は、『図絵』の田山の注釈は錦木塚について全く触れていないが、相模の歌の叶わぬ恋の悲しみを表わす「恋にくちなむ名」と、門口で朽ちていく錦木のイメージが結び付けられたものである」と指摘します<sup>⑥</sup>。

この指摘を念頭に置きつつ和歌を辿ると、相模の詠と錦木の伝承が組み合わせられたような以下の諸例に気付かされます。

千つかまでたつるにしきぎいたづらにあはでく  
ちなん名こそをしけれ

〔拾遺愚草〕上・初学百首・恋廿首・七〇<sup>⑦</sup>

八番 左勝 通能朝臣

錦木もさてこそよそに朽ちにしか恋すてふ名の  
なぞや立つらん

右 有房

おのづからあふにやかふとおもはずは恋には身  
をもなげつべきかな

左の歌、にしきぎはむなくくちてやみに  
けんに、恋すてふ名のなぞやたつらんとい  
へる、すがたことばいとをかしくこそきこ  
え侍れ、右歌も心はあしくもあらぬを、あ



ふにやかふといへるほど、もじのたらぬに  
やあらむ、左の勝と見えたり

『中宮亮重家朝臣家歌合』恋・八番・  
一二七、二二八

弘安元年、百首歌たてまつりし時

花山院内大臣

うき名をや猶たてそへむにしき木のちつかにあ  
まる人のつらさに

『新後撰和歌集』恋歌二・八九一

また、謡曲「錦木」では、女のもとに通い続ける  
も思いが叶わない男について「思ひの数も積りきて、  
錦木は色朽ちて、さながら苔に埋木の、人しれぬ身  
ならば、かくて思ひもとまるべきに、錦木は朽つれ  
ども、名は立ちそひて逢ふことは、なみだも色に出  
でるかや」と語られています。

## おわりに

以上みてきたように、相模の歌意絵は、相模の和  
歌の内容を反映してはおらず、読者は「錦木塚」と  
いう画中詞が付された塚や家内で機を織る女性の様

子を目にします。

その歌意絵は『謡曲画誌』や『東国名勝志』の挿  
絵のような悲恋の流れを汲まない「当世の農村の風  
景」<sup>3</sup>で、注釈部分にも錦木塚に関する説明はありま  
せんので、読者は画中詞が付された塚などの断片的  
な情報から謡曲「錦木」や詞章としても引かれる古  
来著名な能因の詠「にしぎぎはたてながらこそくち  
にけれけふのほそぬのむねあはじとや」を想起し、  
そこからさらに相模の「うらみわびほさぬそでだに  
ある物をこひにくちなん名こそをしけれ」との連関  
性を看取しなくてはなりません。

既に指摘されているように『百人一首図絵』には  
相模の他にも一見すると和歌の内容とはかけ離れた  
絵が付されている事例が散見します<sup>4</sup>。それらの絵と  
『百人一首』中の和歌との繋がりやを了解する為には、  
読者側が歌意絵に描かれたモチーフに関する知識を  
持った上で和歌との連関性を見出すことが必要不可  
欠となりますので、和歌に関する知識がない読者に  
も絵で大まかな詠歌内容を理解するために付された  
歌意絵の本来的な機能からは明らかに逸脱していま  
す。

そのように考えると、『百人一首図絵』は読者に

歌意絵で和歌の内容を（説く）と同時に、読者に歌意絵と和歌との繋がり（10）を（解く）ことを要請している（11）のであり、それこそが当時多く出版された『百人一首』関連の書籍において、読者を引き付ける為の『百人一首図絵』の戦略ではなかったのかとさえ思えてくるのです。

〔注〕

（1）松村雄二氏『百人一首 定家とカルタの文学史』（平成七年、平凡社）、鈴木健一氏「描かれた百人一首の世界 歌意絵の変遷をめぐって」（『ユリイカ』第四四卷第一六号、平成二四年二月、青土社）。

なお、宮本祐規子氏「田山敬儀『百人一首図会』翻刻（一）」（『会誌』第三二号、平成二五年四月、日本女子大学大学院の会）、「田山敬儀『百人一首図会』翻刻（二）」（同三三号、平成二六年三月）、「田山敬儀『百人一首図会』翻刻（三）」（同三三号、平成二七年三月）において歌意絵の翻刻がなされている他、令和二年には『田山敬儀註釈 百人一首図絵（文化四年版）—影印・翻刻』（玩究隠士編集・翻刻 アマゾン Kindle 本）が電子書籍で発

行されている。

（2）これまでに取り上げた歌人は以下の通り（アラビア数字は歌番号、（ ）内の漢数字は本誌号数）。

- |                 |              |
|-----------------|--------------|
| 1 天智天皇（十）       | 2 持統天皇（八）    |
| 4 山辺赤人（四）       | 7 安倍仲鷹（九）    |
| 11 参議篁（四）       | 12 僧正遍昭（九）   |
| 13 陽成院（十二）      | 14 河原左大臣（九）  |
| 15 光孝天皇（八）      | 16 中納言行平（八）  |
| 17 在原業平朝臣（八）    | 19 伊勢（八）     |
| 23 大江千里（十）      | 29 凡河内躬恒（四）  |
| 33 紀友則（四）       | 38 右近（四）     |
| 40 平兼盛（八）       | 41 壬生忠見（九）   |
| 43 権中納言敦忠（四）    | 44 中納言朝忠（四）  |
| 50 藤原義孝（八）      | 51 藤原実方朝臣（八） |
| 55 大納言公任（九）     | 60 小式部内侍（四）  |
| 61 伊勢大輔（九）      | 62 清少納言（四）   |
| 63 左京大夫道雅（十二）   | 64 権中納言定頼（八） |
| 66 大僧正行尊（十）     | 67 周防内侍（十）   |
| 69 能因法師（十）      | 79 左京大夫頭輔（九） |
| 80 待賢門院堀河（十一）   | 84 藤原清輔朝臣（十） |
| 88 皇嘉門院別当（十）    | 89 式子内親王（十一） |
| 91 後京極摂政太政大臣（九） | 93 鎌倉右大臣（九）  |

94 參議雅經（十）

98 從二位家隆（十）

97 權中納言定家（十）  
100 順徳院（九）

\*各号の発行年は以下の通り。第四号（平成二五年一二月）、第八号（平成三〇年二月）、第九号（平成三一年二月）、第十号（令和二年二月）、第十一号（令和三年二月）、第十二号（令和四年二月）。

(3) 『能因法師集』には「東國風俗五首」の一首としてみえる他、『俊頼髓脳』、『奥義抄』、『袖中抄』などの歌字書にも引かれる。

(4) 佐々木孝二氏「北奥の歌枕」『古典和歌論叢』〈昭和六三年 明治書院〉所収）参照。

(5) 家井美千子氏「錦木塚の考察（上）」、「錦木塚の考察（下）」（『岩手大学人文社会科学部紀要』44号、45号 平成元年六月、十二月）、佐藤晃氏「旧南部領鹿角の錦木塚をめぐる伝承」『山形短期大学紀要』34集 平成一四年三月）等参照。

(6) 「北斎「百人一首うばがえとき」の画想と『百人一首図絵』」『アートリサーチ』17号、平成二九年三月）。以下岩切氏の指摘は当該論文に拠る。

(7) 久保田淳氏『藤原定家全歌集』上（平成二九年 筑摩書房）の補注では「参考歌」として「思ひか

ねけふ立てそむる錦木の千束も待たで逢ふよしもがな」『詞花和歌集』恋上・一九〇・匡房）と相模の詠が指摘されている。

(8) 岩切氏は、「情景は、家の中で布を織る女が描かれてはいるものの、はね釣瓶で水を汲む女が旅人に錦木塚を教えるような素振で、その手前では里の女たちが糸を伸ばすような作業をしており、子どもを連れた老婆は束ねた糸を肩にしているという、当世の農村の情景である」と指摘する。なお『謡曲画誌』には「今も此里の女布を織て家業とす」という記載が見える。

(9) 鈴木氏は前掲（1）論文において中納言朝忠の歌意絵が中国の返魂香の故事を踏まえていることを確認し、「歌には、（絶対に逢えないというわけではない）という意味合いがこめられており、それから意味を置換して、香を焚けばかろうじて面影が見られる中国の故事を描くというふうにした、判じ物のような機知が働いた図像と言えるだろう」と指摘する。

また岩切氏も曾禰好忠や中納言敦忠、謙徳公等の歌意絵における漢籍等からの援用を指摘する。  
(10) 著者田山敬儀の付言では、詠歌内容を絵で表し

難く、絵師が難渋するものについては、「いささかもよりどころあらば、いかさまにもかきな」旨が、あらかじめ読者に提示されている。以下付言全文を示す（適宜表記をあらためた）。

つけていふ

この図絵にうつせる山、川、鳥、獸、草木など、歌にあはせて多かかせつれど、絵やうのおなじさまになると、恋の歌などの図にあらはしがたきを、かく人のわづれば、よしや、たゞいささかもよりどころあらば、いかさまにもかきなせ、わがときことは歌によりて絵によらじとゆるしたるもあれば、見む人さるころしたまへ。ときことに古き仮名を用るは、わがつかひなれたればなり。

(11) 岩切氏は『百人一首図絵』に先行する『繪本百人一首』（北尾辰宣・宝暦七年（一七五七））が「故事の絵なども含んでかなり自由な発想の絵画化が見られる」と指摘する。

なお、『百人一首図絵』は文化四年の刊行後、文政五年（一八二二）に江戸書林須原屋茂兵衛、浪花書林多田勘兵衛など六書肆によって、文政七年には須原屋茂兵衛、秋田屋太右衛門の二書肆によつ

て再版されており、岩切氏は「本書が広く享受されていた」と指摘する。

\*和歌の引用は原則として「新編国歌大観」により適宜表記等をあらためた。

—ふじかわ・よしかず 日本文学教授—